

「草莽」から官僚へ —北垣国道の幕末・維新时期—

高久嶺之介

明治期に県令・府知事を歴任する北垣国道（晋太郎）は、但馬の一農民として幕末期尊皇攘夷運動など政治運動に参加していく。北垣の明治期の諸活動については、これまでいくつかの研究があるが、幕末期、とくに生野の変から戊辰戦争までの動きについては史料の少なさもあって研究はない。本稿は、生野の変後から明治初期中央官僚になるまでの北垣の動きを、乏しいながらも関係史料を駆使して素描する。柴捨藏、八木良藏、八木龍藏、日下部国道などさまざまに名を変えた北垣国道、そして原六郎（進藤俊三郎）といった「草莽」の人々が、幕末の政治過程、とりわけ戊辰戦争を通して武士身分、さらに官僚や実業家となっていくことを明らかにしたい。

はじめに

筆者は「北垣晋太郎の幕末」と題する拙稿（本誌第49巻第2号）で、幕末期、主に文久3年（1863）10月の生野の変に至る過程、そのなかで北垣晋太郎の動きを中心に分析した。しかし、生野の変後から明治初年までの北垣の動きについては不明な点が多くあり、鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記』¹⁾二～五冊など鳥取関係の史料にあたりきれていないなどの欠陥から、きわめて不十分な分析になった。本稿では、生野の変後から明治初頭までの北垣の動きを、おもに鳥取関係の史料を補充することで明らかにしたい。

ここで確認するのは、第1に、北垣が明治元年（1868）12月まで、鳥取藩そして長州藩の武士身分になることなく、呼称では「浪士」「但馬の人」であり、その意味では「草莽」の1人であったこと、第2に、「草莽」らしく、独自の動きを示すことである。たとえば、元治元年（1864）に、北垣は水戸の藤田小四郎らの動きにかかわり、備前岡山藩への連絡役をするなどの動きを示し、慶応2年（1866）から3年にかけては長州の諸隊に所属し幕長戦争を戦いながらも、「情報」役など独自の動きを示すこと、慶応4年（1868）には、西園寺山陰道鎮撫総督の軍に入り、その後北陸戦争に従軍し、鳥取藩

の徴兵十二番隊を指揮するなどの動きを示す。そして、こうした働き、特に戊辰戦争での働きが評価され、鳥取藩の武士身分になる。このような「草莽」から武士身分になるのは、北垣と同じく但馬出身の原六郎でも同じであり、原の場合は河田佐久馬のもと山国隊司令士として活躍することが武士身分になる契機となる。

なお、北垣晋太郎は生野の変後、柴捨蔵（芝捨蔵）・八木良蔵・八木龍蔵・日下部国道などさまざまな変名があり、したがって本稿ではその時々の変名、たとえば柴捨蔵（北垣）と表示する。ただし、すべてに（北垣）をつけるのは繁雑であり、（北垣）は最小限とする。

1 生野の変後の八木良蔵（北垣）

1.1 「天狗」勢の筑波拳兵

まず、北垣が藤田小四郎ら水戸の「天狗」勢にいかに関わったか触れてみたい。

山川菊栄『覚書幕末の水戸藩』は、元治元年（1864）正月、長州の桂小五郎が水戸を訪問し、藤田小四郎と拳兵の打ち合わせを行い、軍資金を藤田に渡したとして、次のように書く。

文久四、すなわち元治元年一月、桂小五郎こと後の木戸孝允が、烈公の墓参と称して水戸を訪い、小四郎との間に拳兵の打ち合わせができた様子で、軍資金一千両という約束のうち、五百両を渡された。これを手始めに、小四郎は朝廷のおんため、夷狄をうつためと称して、同志を募り、筑波山に拠点をおいて、豪商、富農の献金を求めた²⁾。

この時の北垣について、大内地山『武田耕雲斎詳伝—一名水戸藩幕末史—』上、では、次のように記述している。

因幡藩の有志八木良蔵（北垣国道）、千葉重太郎は特に水戸を推して、関東に事を挙げ、東西相応じて攘夷を謀らんとした。長藩の桂小五郎（木戸孝允）、佐久間克三郎等は江戸に在つて時勢を伺ふて居た。（中略）さうして小四郎等と深く結ぶ所があり。予て朝命ありし攘夷監察使、有栖川宮殿下が東下在らせるるに当り、之れが守衛として因幡、備前の有志が数百人随従して幕府に攘夷実行を促すと共に、小

四郎等は同盟を募つて筑波山に屯集する。さうして幕府に朝旨を奉じ、攘夷の先鋒たらんことを請願する。長藩からは福原越後等が出府して国冤を訴へんと計画した。

かうした段取であるといふことを、在京の宍戸藩主松平主税頭頼位に陳議し、又水戸藩家老で在京の大森主膳正に文通し、此議を有栖川宮に上陳せんことに目論見たのである³⁾。

この文章は、「因幡藩の有志」として八木良蔵を位置づけているが、「有志」とは正式な因幡藩士ではないという意味であると思われる。ただこの段階では「段取」であり、実際に起こったことを記述したわけではない。しかし、藤田小四郎の筑波山挙兵が大掛かりな計画のもとに行われたことを意味し、八木良蔵もからんでいたことを意味する。

山川菊栄『覚書幕末の水戸藩』で桂小五郎から藤田小四郎に渡されたとする軍資金について、末松謙澄『改訂防長天回天史』はまったく違う言い方をする。

北垣男等の談に依れば長藩邸より因幡有志の手を経て金千両を藤田小四郎等に贈りしことありと云ふと記せしが、此頃更に北垣男より聞く所に依れば、当時土井大炊頭は其邸内多く水藩志士等を養ひ居りし為め費用の多きに堪へず。因て北垣は長州より何程か借用し得ずやと依頼せられ、留守居の奥平数馬や遠藤太市郎に相談せしに、江戸にて彼等の手にては一文の融通も出来ず。其の為め京都に赴き久坂や桂に談じたるに、何程かは都合すべしとて心配の末、金員を調達し呉れ此金高不分明事情を察するに千両といふが実なる、山田市之允（顕義－高久）は北垣と共に護送者となりて東下せり。内実は桂も同伴密行したり。但し此金矢張藤田等の用にとりしには相違なき如しと云ふ。蓋し桂は従前よりの行掛もありて此心配を為せしなるべし⁴⁾（下線筆者）。

要するに京都で久坂玄瑞と桂小五郎に相談の結果、長州の方で軍資金を調達し、それを山田市之丞と八木（北垣）が護送者となって「東下」した。桂も「同伴密行」したらしい。この話は、北垣の明治後半期の証言⁵⁾であり、信憑性は高いと思われる。ただし、「東下」が京都から水戸までかは明示されていないが、後掲する鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記 四』に八木（北垣）が「水戸に赴」いたことが明示されている⁶⁾。なお、軍資金が千両であったかはともかくとして、「長藩邸より因幡有志の手を経て」藤田小四郎に渡されたらしい。

この頃、鳥取藩でも江戸にいる探索方沖剛介を1月16日から2月3日江戸帰着まで水戸に派遣している⁷⁾。藤田小四郎に軍資金を渡した「因藩有志」とは八木（北垣）かあるいは沖剛介か、あるいは両者の可能性がある⁸⁾。

『慶徳公御伝記 二』には、藤田小四郎と八木良蔵（北垣）が江戸で会った事実と、沖剛介が水戸に赴いた記述がある。

藩士藤田小四郎は誠之進^東の第四子、父の志を継ぎて攘夷遂行を念とし、去年中納言（徳川慶篤－高久）に従ひて上京し朝議攘夷に決せるを見て江戸に帰れるが、幕府の処置因循なるを慨し、当藩在江の周旋方千葉重太郎等有志、及び但馬の士八木良蔵^{北垣}等に結びて謀る処あり。因備二藩有志と東西相応じて攘夷に従事せんとす。家老武田伊賀守^{耕雲}、其自重を求めしも聴かず。水戸に帰りて斉藤佐治右衛門等とはかり、江戸に出で、当藩有志に会して義拳決行を議す。剛介（鳥取藩周旋方沖剛介－高久）等の水戸に赴けるは、中老矢野能登の命にて、此間の事情に関するものとす。二月三日に至りて江戸に帰る⁹⁾。（下線筆者）

この記事によれば、水戸藩士藤田小四郎は、江戸で鳥取藩周旋方千葉重太郎と「但馬の八木良蔵」（北垣国道）等に会い「義拳決行」を議したことになる。また、家老の武田耕雲齋が自重を求めたが、藤田は聞かなかったという。耕雲齋が藤田に自重を求めたのは「文久三年癸亥の冬」¹⁰⁾という。また、藤田と千葉・八木（北垣）が会って「義拳決行」を決めたのも、耕雲齋が藤田に自重を促してからまもなくの時期であったろう¹¹⁾。

その場では「因備二藩有志と東西相応じて攘夷に従事」が確認されている。なぜ「因備二藩」なのか。因州鳥取藩の12代藩主は池田慶徳であり、水戸藩主徳川斉昭の五男（庶子）である。備前岡山藩の9代藩主は池田茂政であり、徳川斉昭の九男（庶子）である。つまり、7歳違いの兄弟である。これに徳川斉昭の長男である水戸藩主徳川慶篤を加え、さらに斉昭の七男である一橋慶喜を加えれば、因・備と水戸、さらに一橋を加えた紐帯ができることになる。故父徳川斉昭は、攘夷の主張者として全国的に知られていた。「攘夷」（具体的には横浜鎖港）をスローガンとする紐帯であり、その先導役が水戸であった。

3月27日、水戸藩町奉行の田丸稻之右衛門を大将（総帥）として、藤田小四郎らの筑波山拳兵は引き起こされた。

さらに、同年4月10日、『慶徳公御伝記 二』には、「日光山」より田丸稲之衛門・藤田小四郎・竹内百太郎・岩屋敬一郎の4人が鳥取藩池田慶徳にあてた勅命をもって「攘夷の先鋒」たらんことを要請する文を載せる。

水戸藩士藤田小四郎等の義挙計画、其後進めるが、時機失ふべからずとし、町奉行田丸稲之右衛門を立て、盟主とし、当藩（因州藩－高久）有志と約せる期を待たず、三月二十七日、筑波山に拠り、四方の義徒を集む。四月三日、故贈大納言^烈の木主を奉じて筑波を發し、宇都宮を経て日光に至り、是日、東照宮の神廟に謁し、駐りて攘夷の軍議を擬し、激を諸方に發して、同志の招集に努むると共に、老中板倉周防守に書を寄せ、義徒結束の所以を述べ、訴ふるところあり。又是時を以て、公、及び松平備前守に書を上りて、其志を叙ぶ。其素志を朝廷に奏し、公等の周旋により、勅命を承けて攘夷の先鋒たらんとするなり。幕府、水戸藩其他常・野藩の田丸・藤田等行動に関する報を得、四月八日、令を出だして常・野を戒厳す。是後、田丸・藤田等、野州大平山^(太)に拠る。公に上るの書、次の如し¹²⁾。(略)

元治元年（1864）4月の日付で田丸稲右衛門以下4名連印で「中将因幡侯閣下」（池田慶徳）にあてた書状は、かなり長いが、簡単に要約すると、以下のようなになる。「一事」に、「薩賊会奸」の策謀、具体的には文久3年8月18日の政変をもたらしした朝廷内の三条実美らを追いだした事態を薩摩と会津の「姦謀」が「不可解」。「二事」に、昨年来「攘夷の詔令」が数々布告したにもかかわらず、横浜鎖港が実現しないことが「不可解」。「三事」に、堀田備中守（堀田正睦）や安藤対馬守（安藤信正）など現状に安座し「君臣之大道」にそむいていることが「不可解」。以上により、なにとぞ閣下の御周旋により「攘夷先鋒」の勅許を捧げ奉るよう懇願する次第である、と。

この文章は攘夷のため「日光山東照宮之御廟前」に祈願するというように、幕府の首脳の行動を非難しても幕府を否定する要素はまったくない。さらに「先烈公之遺訓」という用語がこの文書で8回も頻出するように、故徳川齊昭を攘夷の象徴として強調し、池田慶徳を「先烈公之御血統に被為渡且大邦に君臨被為在大義既に天下に顕明いたし東西奉渴望候」と持ち上げるのである。

なお、4月、田丸・藤田・竹内・岩谷によって同じ内容の文章が、備前の池田茂政にも送られている¹³⁾。池田茂政への文章を載せた『水戸藩史料』下編全は、この書の処理について、池田茂政と池田慶徳の動きを次のように記している。「此の書京師に達する

や備前侯松平茂政は其の志に感じ右上書を添へて朝廷に参請し、因州侯松平慶徳は家老黒田日向を以て建言書を幕府に呈し共に攘夷の先鋒たらしめんことを請ふ」とした¹⁴⁾。

この文書を岡山へ届ける役に八木良蔵（北垣）が登場する。

『慶徳公御伝記 二』は、次のように記す。

周旋方千葉重太郎、これを御国（鳥取－高久）に持参し、備前守への上書は、八木良蔵^{後の北垣}_{國道}岡山に持参す¹⁵⁾。

八木（北垣）が岡山に行つて、文書を備前藩主池田茂政に届けたことは、岡山池田家文庫を渉獵して執筆した石田寛『津田弘道の生涯－維新时期・岡山藩の開明志士－』でも触れている。この書によれば、次のように記す。「大平山義徒^(太)を目撃した八木良蔵（略－高久）が岡山に来て、井上（岡山藩士井上千太郎－高久）とともに藩侯に謁し、武田太夫が義徒の大將に推され、旗色鮮明になったことを告げ、因備両侯相携え、朝廷と幕府に建白し、義徒の志を遂げさせてもらいたいと建議した。藩侯は喜び井上に、再び江戸に赴き大平山^(太)の事に関与するようにとの指示を出す。井上は牧野権六郎邸に赴き、事が漏洩しないようにと筆談を行い、励まされる」¹⁶⁾。八木良蔵は井上千太郎と同席しながらも岡山藩主と会っている。

田丸・藤田らがもたらした文書は、鳥取・岡山へのものであったが、その後長州・水戸にも広がったらしい。

『慶徳公御伝記 二』の5月13日の記事に次のようなものがある。

八木良蔵^{北垣}_{國道}、是春当藩有志水戸藩士と結び義拳を計画せるが、是時来りて岡山にあり。鼎蔵（宮部－高久）これと会し其水・長・因・備結合して正義を挽回し、尊攘に尽くさんとの議を聞く。十日、同地を發して来る。途次、長州使者清水清太郎・答礼使者土肥謙蔵に邂逅し、是日夕刻來宿す。又、長州藩内使日谷十寸見（宮部鼎蔵－高久）と称す。記録周旋方伊王野平六至る。即ち、越後（福原越後－高久）等の托書を出だす¹⁷⁾。

さらに、この記事の前に次の記事がある。

肥後脱藩士宮部鼎蔵、四月二十六日湯田（現山口県山口市－高久）に帰りて、三条（三条実美－高久）元中納言に謁し、当藩（鳥取藩－高久）・備前に赴ける始末を復命し、加賀藩勧誘を建築す。

中納言これをよしとし、直に加州行を命じ、又当藩に至らしむ。鼎蔵、藩主松平大膳大夫（毛利敬親－高久）に説けるに、亦これを可とし、中井栄次郎を使者とし同行せしむ。家老福原越後・国司信濃、当藩の荒尾但馬・同駿河への書を托し、鉄煩製造の秘法伝授を請けんとす¹⁸⁾。

八木良蔵は岡山で宮部鼎蔵と会い、宮部は八木（北垣）から水戸・長州・因幡・備前4藩が結合して「尊攘に尽くさん」議を聞いた¹⁹⁾ようだ。一方、宮部は、4月26日に三条実美と湯田で会い、鳥取藩と備前岡山藩との「始末」（つまり両藩連携の状況）を聞き、さらにこれに加賀藩を加えようと提案する。三条はこれに同意し、宮部に加賀藩へ行くことを命ずる。また宮部は、長州藩と鳥取藩の家老連中に「鉄煩製造」の「秘法伝授」を請けんとした。つまり、攘夷のために砲台設備がはかられたのであろう。

さらに、八木良蔵が備前藩にもたらした書面に対して、『慶徳公御伝記 二』は、5月24日、「御側銃頭御刀番兼帯山田佐次郎、松平備前守（池田茂政－高久）の返書を得て帰着す²⁰⁾と記す。池田茂政の返書は、「^(大)太平山屯集の徒の為、天幕に横浜攘夷先鋒の命あらんことを建白し、なほ、鎖港の成功危ぶまるゝより、右屯集者応援の意をも含めて、番頭以下一隊を東下せしむる旨を述べ、これを佐次郎に附す」という内容のものであった²¹⁾。つまり、太平山に集まる「徒」のため一隊を東下させることを申し出るものであった。

なお、鳥取藩主池田慶徳、岡山藩主池田茂政の水戸尊攘派に呼応する動きは、5月には池田慶徳が、書を朝廷および幕府に奉り、すみやかに攘夷の期日を確認し、太平山屯集の徒および諸有志を先鋒たらしめんことを請うまでに至っている²²⁾。しかし、6月14日には岡山藩主池田茂政は書を前宍戸藩主松平頼位に送り、水戸藩内訌の事情を問うような状況になっている²³⁾。

水戸藩の内訌、すなわち水戸尊攘派と市川三左衛門ら諸生派との対立は、攘夷運動の行方に暗雲をよせることになる。また、藩内でこの3月から6月にかけて「尊攘の軍資」と称し金銭を強奪する行為があいつぎ、6月6日の下野国栃木町の焼き払いと町民の斬殺という田中愿蔵隊の暴虐行為にあらわれるような衝撃的な事件がおこり、それが住民の「天狗」勢への恐怖心になってゆく。また、水戸城下の諸生派との対立は、藤田

小四郎、田丸稻之衛門らの挙兵の目的を変えてゆく。彼らの挙兵の目的は、横浜に押し出して攘夷の名分を明らかにすることにあつたが、激論の結果、7月24日、攘夷に先んじて、水戸藩執政市川三左衛門らを討つことに当面の方針を変えた²⁴⁾。

八木（北垣）の動きは、5月以降は水戸尊攘派の動向、水戸藩の政争には登場しない。また、『慶徳公御伝記』に載るのも5月が最後である。おそらく、千葉重太郎のもと、江戸の赤坂檜町の長州屋敷に潜伏していたのだろう。

1.2 北垣の「日記」による藤田小四郎らの動き

元治元年（1864）のこの時期を、勝海舟の動きとからませながら回想した北垣の文がある。明治32年（1899）1月19日、勝海舟が死去する。それから5日後の24日、勝精（勝の養子）より訃報が届いた北垣は弔礼の書を郵送するとともに、日記に回想の文を載せた。

維新ノ前元治甲子年六月、藤田兵ヲ野州ニ起シ、長州ハ益田・福原・国師ヲシテ京師ニ迫ラシム。天下騒然、殺気満天。勝先生偶マ大坂ニ寓ス。国道之レヲ訪フ。先生其来意ヲ問フ。余答テ云。国道春来江戸ニ在リ、関東有志ノ士ト交ル。常野ノ士義旗ヲ大平山ニ揚ケ、以テ攘夷ノ事ヲ謀ル。水府ノ士其中心ニシテ、田丸稻之右衛門・藤田小四郎其巨魁タリ。宍戸侯其暴挙ヲ憂ヘ、国道及ヒ小畑友四郎宍戸侯家老・千葉重太郎三名ニ内示シ、恭順以テ天朝幕府ニ懇願スヘキ旨ヲ田丸・藤田ニ諭サシム。国道等旨ヲ受ケ大平山ニ急行シ百方談論、遂ニ一橋・因州・備前三公ニ依頼シテ天朝幕府ニ議ヲ献ス。其主意ハ、先ス会津・薩摩ニ藩ヲ黜ケ長藩ノ上京ヲ赦ルシ、以テ攘夷ノ実ヲ挙ルニ有リ。宍戸侯父子・藤田等ガ能ク壮士ヲ鎮撫シ、侯ノ諭旨ヲ容レタルヲ善ミシ、又国道及ヒ千葉ニ囑シテ其建議書ヲ齎ラシ、京都・因州・備前ニ派ス。故ニ国道ハ備前ニ使シ東ニ帰リ宍戸侯ニ復命ス。然ルニ天朝幕府其議ノ容レラル、景況ナク、益ス会薩威力ヲ逞クシ、本月六日京都池田屋ノ変アリ。我輩同志ノ士多ク殺戮及ヒ捕縛セラル。東西ノ時勢日々弥々切迫ナリ。故ニ再ヒ江戸同志ノ者ト謀リ、上京シテ京坂在留ノ同志ト相議セント欲スルナリ。先生ノ門下坂本・高（龍馬）・望月等皆信友ナリ。望月既ニ池田屋事変ニ死ス。其他ノ門下生ト談シ先生ノ高見ヲ聞カント欲シテ参観シタルナリト²⁵⁾。（下線筆者）

この北垣の回想を、ある程度史実を補いながら述べたい。「元治甲子年六月」という

と、その2か月前の4月14日、田丸稲之衛門、藤田小四郎ら「天狗勢」が太平山（現栃木市）に立てこもった。それから5月30日天狗勢は太平山を下り再び常陸国筑波山に本営をかまえることになる。この藤田らが太平山にいる時、すなわち水戸藩の支藩である「宍戸侯」=松平頼徳が北垣・小畑友四郎・千葉重太郎に内示し、「恭順以テ 天朝幕府ニ懇願スヘキ旨」を田丸・藤田に諭さしめようとした。北垣らはこれを受けて太平山に急行し、禁裏守衛総督一橋慶喜・鳥取藩主池田慶徳・岡山藩主池田茂政に依頼して朝廷および幕府に「議」を献策しようとした。「議」とは攘夷の議であり、具体的には「横浜鎮港」である。この時「宍戸侯其暴挙ヲ憂ヘ」とあるように、憂慮していたのは宇都宮や下総・下野国などでおきていた田中愿蔵など浪士集団による金銭強奪の蛮行である。したがって「宍戸侯父子」、すなわち松平頼位・松平頼徳は、「藤田等ガ能ク壯士ヲ鎮撫シ」、頼位・頼徳の論旨をきいたことを善とした²⁶⁾。また、松平頼徳は北垣と千葉に建議書を託して、京都（一橋慶喜）・因州（池田慶徳）・備前（池田茂政）に派遣した。北垣は岡山に使として向かい、帰って頼徳に復命した。しかし、朝廷も幕府もその議をいれるような状況にはなく、ますます「会薩」は威力を増大させた、とする。その結果が6月6日（実際は6月5日）の京都・池田屋事件である。この結果、宮部鼎蔵をはじめ多くの同志のものが殺戮および捕縛されるに至った。

さらに、禁門の変で長州の「攘夷論勢力」の中心人物久坂玄瑞の戦死、その後の英・仏・蘭・米の4か国艦隊が下関砲台を占領する事態になる²⁷⁾。以上、このような状況が北垣を追い詰め、勝海舟のもとを訪問することになる。なお、禁門の変後、英・仏・蘭・米の4か国艦隊が下関砲台を占領し、その結果長州藩は「攘夷」を放棄するに至るが、このような結果が北垣に与えた影響は不明である。すくなくとも北垣は攘夷論者ではない勝を訪問するのである。

北垣によれば、勝海舟の死去（明治32年〔1899〕1月19日）後の24日に勝精（養子）より訃報が伝わり、36年前、北垣「二十七歳」（数え年）の時、すなわち元治元年の時を思い出したのである。すなわち、「同志者ト謀リ勝先生ヲ訪ヒ、先生ヲシテ眼前ノ危急ヲ救済セシメント欲シ、力ヲ極メテ論シタル半日ノ問答ナリ。余ハ始テ先生ノ境遇ト真意ヲ聞キ感銘少ナカラスト雖モ、当時ノ勢又如何トモスル能ワス。以テ見ルヘシ。先生ハ先生ノ境遇ニ因テ如何トモスル事能ハス。余ハ余ノ境遇ニ因テ如何トモスル事能ハス。（中略）先生ノ幽閉セラレタルモ亦同月（7月－高久）ナリ。藤田小四郎カ始テ野州下妻ニ於テ幕府ノ追討兵ヲ破リタルハ七月七日ナリ。（中略）実ニ一場ノ夢ノ如シ。先生ノ訃音ニ接シ、追慕景抑ノ余之レヲ録シテ子孫ニ示ス」²⁸⁾。

1.3 禁門の変後の柴捨蔵（北垣）

『原六郎翁伝』上によれば、元治元年（1864）7月19日の禁門の変後、柴（北垣）は江戸より原とともに、10人ほどが西上し、京都に向かう。しかし、彼らが京都に着いた時、長州の全面敗北という禁門の変の帰趨も定まっておらず、そのため柴・原・西村哲二郎の3人は本圀寺事件²⁹⁾の首謀者である河田佐久馬らの2番目の幽居先である伯耆国黒坂（現鳥取県日野郡日野町黒坂）の「某寺」³⁰⁾、すなわち泉龍寺で会っている。河田佐久馬と柴・原との関係は、おそらく千葉重太郎との関係で見知っていたと思われる。原については、「京都に於て武器調達に従事した時から河田より多大の便宜を与へられ、後には『河田の子分見たやう』（原の談話）に見られるやうになつた」³¹⁾という。

柴（北垣）・原の黒坂訪問は、禁門の変後9月頃と思われる、『慶徳公御伝記 三』に記述がある。

是頃、二十士の徒、黒坂にありても自由なれば、有志の来り通ずる者ありて、去年生野拳兵の同志柴捨蔵・原六郎の如き、河田佐久馬を訪ひて長州に赴けり³²⁾。

「黒坂にありても自由なれば」とあるように、京都ほどではないにしても河田をとりまく状況は「自由」だったらしい。しかし、「河田も^{〔執〕}執居の身とて三人を庇護することが出来ない」³³⁾状態だった。

河田訪問の後、柴と原は、「長州に赴けり」とあるが、『原六郎翁伝』上は、柴と原および西村哲二郎は一時伯耆の江波家に潜伏した、とある。そして10月頃、河田の紹介状により柴・原は西村を残し、備前岡山藩の筆頭家老伊木長門守（忠澄）を頼って岡山に移る。伊木忠澄のもとで潜伏中、第1次征長の役が起きる。この時伊木は、柴・原の両人を広島に赴かせて形勢を探るが、11月、長州藩は幕府に恭順の意を表し、両人は伊木にこのことを復命し、しばらくして伊木の知行地の備前の児島（現岡山県倉敷市）に潜む。備前の児島時代について、原は次のように書く。「金もなくなり、食ふに困つて居ると恰度海浜で地引を曳いて居つた。夫れに加勢して魚を貰ひ、煮て食つて飢えを凌いだ」³⁴⁾。

翌慶応元年（1865）春、柴と原は京都に上り、7、8人とともに、船待ちをしている間に高杉晋作に会い、その添書をもって長州に入った。その後、森恵造『近世名匠談』に記載があるごとく、長州藩士森寛齋が柴捨蔵を救うシーンがある³⁵⁾。

1.4 長州での八木（北垣）

長州に入ったあとの北垣と原の動向は、『原六郎翁伝』上で断片的なことしか分らない。まず、原六郎からいうと、慶応元年（1865）春、遊撃隊に入り、それから他の隊に変わる。慶応2年6月17日小倉口の戦闘が長州藩奇兵隊の先制攻撃で始まり、長州藩の圧倒的優勢で進む。7月30日老中小笠原長行の小倉からの脱出など幕府軍は事実上の敗北を遂げてゆく。「私（原－高久）は北垣氏と共に小倉に出陣」とあるから、原と柴（北垣）は、小倉戦争に加わったが、この戦争への長州軍の主力は奇兵隊で、おそらくその中に加わったと思われる。小倉戦争後、原は三田尻の海軍兵学校で英学を学び、さらに海軍兵学校明倫館にて大村益次郎から「仏式練兵」を学んだ。

北垣の場合、原よりも不明な点が多いが、6月から7月にかけて「翁（原－高久）は小倉方面に、北垣は石州方面にあつた」が、北垣は石州口での戦闘のあと、前述したように、小倉戦争に従軍したと思われる³⁶⁾。

ただ、北垣は単なる一兵卒ではなさそうである。北垣は、長州にいても長州藩の幹部に手紙で連絡をとれる人物であった。慶応元年6月27日に八木龍蔵（北垣）は桂小五郎に手紙を送った。内容は、将軍家茂が閏5月22日に上京参内し勅答があったことを伝える書簡である。いわば京都の情勢を報告した書簡である³⁷⁾。禁門の変後、桂は但馬出石に潜伏し、「俗論派」政権打倒後の慶応元年（1865）4月末に下関に着いている³⁸⁾。八木龍蔵の書簡はそれから2か月後である。もう一通は、同年10月5日八木龍蔵から同じく木戸貫治（桂）宛の書簡である³⁹⁾。ただし、この書簡は宛名が「木戸先生執事」になっている。「先生」という表現は、木戸が帰国後、事実上藩内の指導的位置に就いたためであろう⁴⁰⁾。

この二通目の書簡の内容は、京都から帰った坂本龍馬から八木（北垣）が直接聞いた内容をもとに自らの考えを述べたものである。要するに、9月20日、長州再征をめぐる朝議が開かれ、大論戦の結果、一橋慶喜の主導で長州再征の勅許が取り付けられたことに関係する。「橋会桑」は「兵威」を以て「奉軽蔑」る状態で、「彼傍若無人之振舞、今更驚嘆すべき事無之」、「彼鳳詔を懐に入れ、我を威すの策小兒に似たり」、「先生御論之如」く、兵馬を以て相待つ策ここよりほかに策はない。しかし、世の形勢は「非義之勅」で列藩は動かないとし、「我れは必戦相待ち候事に候得ば、別段相騒ぐ事も無之」、「橋会桑之悪周旋」はいまさら驚くほどのことではない、とする。要するに、長州再征をめぐる、「橋会桑」の動きに肅然と対抗しようと述べたものである。

慶応元年の時点で、坂本龍馬に会い、このような書簡を事実上長州藩の幹部である木

戸に出すことは、八木（北垣）が単なる長州の一兵士ではなかったことと思われる。

なお、慶応3年の頃の八木の状況がわずかにわかる史料がある。慶応3年6月26日から8月晦日までの河田佐久馬「備行ミちの記・さすらへ日記」（山口県文書館蔵、毛利家文庫）である。この中で、河田佐久馬と八木（北垣）が山口で接触していたことが書かれている。河田を含めた二十士は元治元年（1864）8月1日より黒坂に幽閉されていたが、慶応元年（1865）3月には鳥取に戻される。これは、第一次長州征伐に際して米子まで出陣した鳥取藩主池田慶徳が、黒坂に出入りする「浪士」の風説を聞いたためであった⁴¹⁾。さらに、慶応2年（1866）7月28日、河田ら二十士は幽閉中の鳥取荒尾志摩屋敷を脱走する。脱走した河田ら15名は長州に行く。河田が長州の和木村（現山口県玖珂郡和木町和木）の浜へ着船するのは2月17日であるが⁴²⁾、5月6日山口に着す。そして河田の山口到着後すぐに八木の河田接触が始まる。「八木入来」という形で八木が河田のところに行く日は、5月6日・7日・9日・13日・14日・15日・17日・20日・21日・22日・25日・26日・27日・6月18日・27日・16日・17日と多く（17日間）、頻繁に接触を重ねている。また、5月10日には八木と原六郎が河田を訪問し、河田は「粗酒」を出している。なお、八木の訪問には、「木戸子入来」（木戸寛治）、「広沢氏」（広沢真臣）、「杉氏」（杉孫七郎）などと異なり、「八木入来」とほぼ呼び捨ての形とられている（ただし4回、「八木氏」と表示されている）。ここに後に見るように、八木（北垣）が河田の配下のように見える。

1.5 戊辰戦争直前の八木（北垣）

慶応3年（1867）11月25日、長州藩家老毛利内匠（親信）は、藩兵を率いて船で三田尻を発した⁴³⁾。11月29日、長州藩諸艦は摂津国打出浜に着し、長州藩兵が相次いで上陸し、ついで西宮に進み、六湛寺をその本陣と定めた⁴⁴⁾。

『慶徳公御伝記 四』によると、長州藩兵が西宮に到着したことを記述する文章の中で、八木（北垣）が登場する。

『慶徳公御伝記 四』の文章を要約しよう。12月4日、備前岡山藩荒木三介が御分知池田丹波守（^{まさのり}政礼）の陪従として西宮に止宿していた時、荒木三介の旅宿に近日に上陸した長州人隊中の斯波捨蔵と申すものが面会を申し込んできた。対面したところ、斯波は先年来面識のある「丹州出生」の八木良蔵で、良蔵が申立てた事柄は、虚実は不明であるが、容易ならざる事につき、すぐさま荒木は岡山表に急飛をもって申し上げた。また、備前藩と因州藩は「万事一途に出で申したき」につき、因州藩の周旋方伊王野次郎

左衛門まで申し、(家老) 荒尾駿河・「御側御用人」・「御側役」と相談し、私ども「兩人」が三介のところに入った。三介から聞いた「申立ての旨趣大略」は「(長州藩は) 今般国本より一万人余の兵数で七隊に分け、山陽道・山陰道の二道にわけ、ほかに海軍二隊、うち一隊は全軍の先鋒でその主将は毛利内匠(親信)で、25日に発途した。そして摂州甲山上ヶ原村辺ならびに西宮駅裏に止宿した。26日は、山陽道・山陰道をもに発途し、道々各藩に使節を立て、応接に2日を予定しているが、しいて通行をはばむことがあれば、やむをえず戦争に及ばざるを得ない」ということであった。一方、戦鬪に及ばない方法も考えていて、「西宮辺より西方え不残人数繰込置、決て暴動無之、御沙汰相待候様、大膳父子(毛利敬親・元親-高久)より各隊主将へ急度申付候二付、何れも恭順謹慎ニ罷候趣」、すなわち「天朝」からの「御沙汰」を待つように毛利敬親・元親より各隊の主将に申し付けおいたので「恭順謹慎」という状態である。このような状況を八木良蔵から聞いた荒木三介は、八木の話が前後矛盾しているを見た。すなわち、「未夕天朝より御沙汰無之内は、先鋒隊は西ノ宮にて恭順罷在、其後隊は路地にては戦争にても罷出候杯と申事、甚以不揃之事、全く虚勢を張り、兵威を以脅し、其雷同を促し、席卷して出るの策か相分り不申候へとも、虚実は聞き、不容易事件二付、承候儘申上候」、といて、これを岡山表に知らせたのである⁴⁵⁾。

なぜ八木良蔵は荒木三介に長州藩兵の硬軟両法の状況を伝えたのであろうか。おそらく岡山藩が長州藩の軍事行動にどのように対応するかをはかっていたのであろう。そうすると、このような行動をとる八木の役割がよくわかる。八木は事前の伝達役、つまり「諜報」役であったのであろう。

12月8日、夜に入って、朝廷は、長州藩主毛利敬親父子およびその末家の官位を復して入京を許し、広島藩世子浅野茂勲に命じて、西宮にある長州藩重臣を率いて上京するべきと命を伝えさせた⁴⁶⁾。12月10日夜、長州藩家老毛利内匠(親信)は、藩兵三中队を率いて粟生光明寺(現長岡京市)を發し、京都に至り相国寺に入った⁴⁷⁾。八木(北垣)も相国寺に入ったかどうかはともかく、京都に入った長州藩兵の中にいたはずである。

2 戊辰戦争と柴捨蔵(北垣)

2.1 山陰道鎮撫総督軍と柴(北垣)

慶応4年(1867)正月3日、旧幕府軍と薩摩兵が鳥羽で衝突し、いわゆる鳥羽伏見の

戦いが勃発する。正月4日、西園寺公望は山陰道鎮撫総督に任ぜられ、5日には薩長の藩兵をひきいて、山陰道ではなく、嵯峨・水尾・原・越畑を経て馬路村（現亀岡市）に滞陣する。この行軍には長州藩浪士河内山半吾とともに柴捨蔵（北垣）が先導をつとめた、と『西園寺公望伝』第一巻は言う⁴⁸⁾。柴捨蔵が長州兵とともに京都に入っていたことは前述した。

1月9日、この鎮撫使一行が篠山口から福住への間道を抜け出る際には、在地の弓箭組郷士を徴集することが考えられたが、徴集の文を作ったのは柴捨蔵のようである。

丹波弓箭組勤王之者篠山口御発行に付急に人数入用候間支度調次第明日明後日之内御本営に駆付可申候事

慶応四年正月九日

官軍執事 ㊦

馬路村両苗総代

人見 立之進

中川禄左衛門 江

右執筆者^(ママ) 芝 捨蔵殿に而御書賜り候に付両郡弓箭士へ報知候処篠山口福住御本営向弓箭手槍等携参着す⁴⁹⁾（以下略）

柴捨蔵はなぜ西園寺の隊にいたのであろうか。そのことをうかがわせる史料が、中川家文書（立命館史資料センター蔵）の「口上」（帰国願）と題する史料で、柴捨蔵から小笠原美濃介宛の書簡である。

口上

一下拙義従来御国之御扶助に預り嫌疑之身を以て長々蒙御厄介を刑余之者再度 天日を拝し再生の御供恩実ニ譬る処無之候、抑昨年御先鋒上京之砌必死之戦時、今日程聊報恩之機会と存し込ミ入隊之上先鋒御人数ニ被差加度旨御願申上候所、脱民之苦情御憐察被成下、直ニ御許容に相成入隊御沙汰被仰付、先鋒へ被差立候条、過分之幸福至恩之程極而難有奉感佩候、本より迂陋之質何之御用にも相立不申碌々送日罷在候内既ニ惣隊御帰国に相成候段、下拙に於而も同様帰陣可仕候得共最早今日之時勢全ク御蔭に依而公然帰国も相叶候身上も相成、且国元老母事長々病氣之処、下

拙兄弟外に侍養に当候者も無御座、深く難渋仕候に付一応帰国仕老母を侍養、聊多年之不孝罪を償度候間、何卒右之至情御憐察之上出格之御僉議を以て御暇被仰下度懇願之至ニ御座候、万々此段御政府へ御執達宜敷奉願上候、以上

慶応四年

六月

但州

柴 捨藏

日下部国道 花押

小笠原美濃介 殿

右前書之通願出候間、出格之御僉議を以て於当地急速願之通被遂御許容被下候様奉願上候ハ、此段宜御沙汰可被下候、以上

鋭武隊

同日

小笠原美濃介 印

御堀 耕助 殿

(下線筆者)

この史料によれば、柴捨藏（北垣）はまず自らを「嫌疑之身」「刑余之者」とし、そういう者が「御国之御扶助」、すなわち長州の御扶助に預り「天日を拝し再生の御供恩」に浴する身になったとする。そして長州鋭武隊の小笠原美濃介に訴え、「入隊之御沙汰」を仰せつけられたこと、つまり小笠原によって柴の鋭武隊入隊が許されたとする。そして「六月」には、山陰道鎮撫使が帰国する時、「国元老母事長々病氣」で、深く難渋し、「一応帰国」し老母を侍養し、「多年之不孝罪」を償いたい、と帰郷（但馬能座村・現兵庫県養父市能座）を小笠原に訴えた。それを受けた小笠原は元御楯隊総督の御堀耕助に願い出ている。明治以後の北垣の日記『塵海』には、19歳の時に死去した父三郎左衛門は一切登場しないが、母リキは時々登場する。リキは明治19年（1886）4月22日に「疑似コレラ性」により82歳で死去するが、この時北垣は哀切極まる文を記しており⁵⁰、北垣の「多年之不孝罪」を素直に解釈してもよいと思われる。なお、「六月」と

いう記述については、西園寺の山陰鎮撫使一行が大坂に着するのが3月19日で、柴捨蔵が5月31日には京都にいることから、「六月」という月の意味はよくわからない。

西園寺らの隊がどの行程を進んだか、在地の藩が恭順の誓書を差し出したこと等を示した「山陰鎮撫始末」（山口県文書館蔵，毛利家文庫）という史料がある。これは西園寺の山陰鎮撫使が正月5日京都を發し，3月27日に「成功」（成果）を朝廷に奏聞するまでを記したものである。「山陰鎮撫始末」は，山陰鎮撫使一行の経路とかかわった各藩の人物を記している点で興味深い，「山陰鎮撫始末」の記載の最後が次のような人名で終わっている点である。

小笠原美濃介

沖 探三

柴 捨蔵

小笠原美濃介は，前述した如く長州銳武隊を指揮する人物である。「山陰鎮撫始末」でも参謀として登場する。沖探三（守固）は前述した沖剛介の兄であり，鳥取藩主池田慶徳の側近であった人物であるが，西園寺が鳥取に来藩した際，御雇御用掛になり，松田正人とともに鳥取を發し，丹波・丹後の諸藩を巡る⁵¹⁾。上から三番目とはいえ小笠原や沖と並んでいる柴の姿に，山陰鎮撫総督一行での柴捨蔵の位置が推測される。

なお，丹後久美浜（現京都府京丹後市久美浜町）で，1922年（大正11）に刊行された稲葉市郎右衛門編述『過渡の久美浜』の慶応4年の叙述に次のことが載っている⁵²⁾。

二月初旬陣營を官軍出張所と改称し，久美浜元代官中山九八郎・柴捨蔵之を佐く。（中略）三月小笠原氏は上京し，中山九八郎留守を預る，中山性温厚民心の収攬に努め頗る人望ありたり。

斯くて事漸く緒に就くや久美浜県を置かれ，知県事伊王野治郎左衛門の来任となり，五月廿五日小笠原の代理中山・柴兩人より事務を引継ぎ，官軍出張所は久美浜県庁となる。

やはり，小笠原の下で柴は働き，久美浜で民政の一端を短期間であるが担っている。そのほか山陰鎮撫使一行の中で柴捨蔵（北垣）の動きとして特徴的な点を記しておこう。

2月5日、西園寺は鳥取まで来るが、「総督、又慶徳公の退隠を不可とし、人を京都に馳せて申請せらるる処有り」と『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』「安達清一郎」の叙述で伝えている⁵³⁾。この池田慶徳「退隠不可」の背景には安達清一郎（清風）がおり、「池田慶徳の退隠問題に強烈な論陣を張り、復職を実現させた最大の功労者は安達であった」⁵⁴⁾。続けて「十八日柴捨蔵来り問ふ。捨蔵は、後の北垣国道にして、清一郎在京の時、八木龍蔵と変名し、清一郎の庇護を受け、後長州に走り、当時総督近侍として来たりしものなり」⁵⁵⁾と伝えている。柴捨蔵（八木良蔵）は、以前に庇護を受けた鳥取藩の重臣安達清一郎を訪ねたのであろうが、この時は「総督近侍」としてあらわれたのである。

『慶徳公御伝記 四』は、「八木良蔵と称し、水戸に赴き、長州にも在りしが、是春は西園寺鎮撫総督に附属して来国せる事もあり」とつたえ、さらに「河田佐久馬・松田正人をはじめ、当方の周旋方有志とは早き頃より交深く、別に仕官もなければ旁御雇とせるなり」と記している⁵⁶⁾。（下線筆者）

また、『原六郎翁伝』上に掲載している原六郎の「但馬会席上講演」によれば、原とともに八木良蔵（北垣）は山陰道鎮撫総督軍に従軍中郷里に立ち寄ったらしい。

早速上方に向つて出発したが、恰度西園寺侯が山陰道鎮撫使として巡回せられ、北垣氏も侯に随行中であつたから、久振に但馬に立ちよつて、数多の有志に出会つた。

其時京都から東山道鎮撫使岩倉副総領に従軍せよとの御沙汰があつたので、（原は－高久）大急ぎでその方に参加したのである⁵⁷⁾。

2.2 丹波山国隊と柴捨蔵

その後の八木（北垣）の動きの前提として、河田佐久馬の動きについてまず触れておこう。

慶應4年（1868）正月24日、長州藩士宇多朔太郎と静岡彦太郎が池田慶徳に会い、河田佐久馬等の「形勢切迫至急帰参方」を求めた。この結果正月27日、池田慶徳は河田佐久馬等に帰参を許す命を發した。この報は京都留守居に伝わり、2月3日家老荒尾駿河は河田佐久馬に慶徳の命を伝え、ついで6日中井範五郎に、7日には河田精之丞に同様の命を伝えた⁵⁸⁾。さらに17日には佐久馬の弟弘吉郎（弘蔵・景雄、精之丞の次の弟、形式的には「佐久馬倅弘吉郎」）⁵⁹⁾に「御勘気御免御雇京都詰周旋方仰付」の旨を達

した。このようにして、河田佐久馬は公に活動できる地歩を獲得したのである。2月11日、河田佐久馬は、東山道先鋒御人数参謀に命ぜられ、中井範五郎はその附属に命ぜられた⁶⁰⁾。

さらに、その後3月3日、河田佐久馬は馬場金吾（因幡藩士）に代わって東山道を行く山国隊の隊長になる。山国隊とは、1月4日山陰道鎮撫使西園寺公望の檄文に呼応して、結成された丹波山国郷（現京都市）の義勇隊である。1月9日と10日の山国郷の名主層を主とした会合で義勇隊結成が決定された⁶¹⁾。翌11日、部隊は2つに分かれ、そのうちの1隊が因幡藩に附属して東山道を進軍していくことになる。

河田が山国隊のメンバーに顔を合わせるのは3月5日であり、一行が甲府城下に入る直前であった。また、原六郎が司令士として細木元太郎とともに山国隊に加わるのは3月7日であった⁶²⁾。

なお、山国隊の記録として隊中取締であった山国郷の名主藤野齋が書いた『征東于役日誌』（『征東日誌』と略称）がある。この中で、藤野は5月6日から7月7日までの2か月間事情により京都に帰るが、その中で藤野が帰郷中柴捨蔵（北垣）に接触した記述がある⁶³⁾。5月31日、京都で、藤野は柴捨蔵に会う。『征東日誌』は、「河田弘蔵亦来問セラル。柴捨蔵来訪セラル。元長州鋭武隊ニ属セラル」⁶⁴⁾、とある。この文によれば、柴は長州の鋭武隊に属していたが、それが西園寺の山陰鎮撫使に属していた時で、「元」とあるように、この時期はそこから離れていた。藤野が柴に会った理由は、河田佐久馬の言葉を伝えるためであった。河田の伝言とは、「近江（藤野齋－高久）同道ニテ東行セスンハ、将来絶交スヘシト。願者一書ヲ賜ヘト。不及其儀、只其方向ヲ聞ノミ（中略）、只其一言アルノミト」⁶⁵⁾、ということであったが、これは柴に山国隊に加われという意味であったろう。この言葉は、相当柴には響いたようである。「河田氏ノ一言柴氏ノ膽ニ^{きも いしぼり}砒リスル処ナルヲ以テ也」という表現がある⁶⁶⁾。原六郎は、「河田佐久馬の子分見たやうに見られていた」時期があり、また河田の下で山国隊に参加したことは前述したが、柴も長州山口にいた頃足しげく河田のもとに通っていたことはすでに述べた。また、維新後河田が死去（明治30年〔1897〕10月12日）するまで、北垣は「河田翁」と最大限の敬意をもって遇していた⁶⁷⁾。

さて、6月3日には、「近江（藤野齋－高久）、柴捨蔵氏へ前日ノ報謝袴地一反ヲ答礼ス。（中略）不日同道東上可致ノ決答書面ヲ既ニ出セリト」⁶⁸⁾と記載がある。「不日同道東上可致」という文面は、柴捨蔵がいずれ同道して東上致す、と読める。しかし、この時点で柴が河田や藤野と「同道」して東山道を進軍するというのではないようだ。

6月21日、いよいよ北越行が決まったらしく、「柴捨蔵氏入局、北越地方へ発信可致之処、河田瀬（精－高久）之丞、来ル廿六日蒸気ニテ帰東セラルニ同発セントス」⁶⁹⁾とある。

6月22日には、「仁和寺宮北越地方へ御進發、松尾副参謀河田弘吉随從ニ付之ヲ見立ル。井上省吾氏又同行セリ。柴氏都合ノ義アリ随從セス」⁷⁰⁾とある。6月24日、「柴捨蔵君騎馬ニテ来訪シ云、弥々廿六日出發ス（中略）別飲一酌シテ再会ヲ期シ別袖ス」
「柴捨蔵氏弥々明曉出京スヘシト、尚入年挨拶被申入、菓子一籠ヲ被贈与、留別輕酌袂別シ之ヲ堀川邸迄送り別ル」としている⁷¹⁾。こうして、6月26日、柴捨蔵は北陸に向けて京都を出発する。

2.3 徴兵十二番隊と柴捨蔵

柴捨蔵は、どのような軍隊編成の中で戊辰戦争に参加していくのだろうか。西園寺の山陰道鎮撫使に参加したのち、柴捨蔵は鳥取藩の軍隊編成の中に組み込まれていく。

慶応4年（1868）5月から6月にかけて、鳥取藩でも戊辰戦争用の軍隊編成が進む。5月18日、小頭4名、足軽76人が続々京都に集まり、御所詰御使番岡村喜兵衛が徴兵隊長に任命される⁷²⁾。

さらに6月3日、隊長を岡村喜兵衛として、その下に一番小隊長に山本清之丞、二番小隊長に南条熊之丞、さらに半隊長・分隊長・嚮導隊等が定まった⁷³⁾。この後この隊は「徴兵十二番隊」と命名され、6月15日寺町御門の御警衛が命ぜられた⁷⁴⁾。

6月19日、在京家老荒尾駿河は軍監として越後口総督嘉彰親王に附属して出発することになり、河田弘吉郎に軍監附属として出張が命ぜられ、さらに「但馬の浪士」である柴捨蔵に「御雇」として出張が命ぜられた⁷⁵⁾。『慶徳公御伝記 四』には、この時点での北垣の経歴の簡単な記載がある。すでに明らかにした点もあるが、この時点での北垣の経歴を知る上で重要である。

捨蔵は北垣晋太郎にして、文久三年生野の変に加はれる以後、八木良蔵と称し、水戸に赴き、長州にも在りしが、是春は西園寺鎮撫総督に附属して来国せることもありて河田佐久馬・松田正人をはじめ、当方の周旋方有志とは早き頃より交深き、別に仕官もなければ、旁御雇とせるなり⁷⁶⁾。（下線筆者）

この記載によれば、北垣は柴捨蔵、八木良蔵という変名を使い分けながら、仕官もし

ないでいたらしい。

6月22日、越後口総督嘉彰親王が京都を出発し、軍監荒尾駿河が徴兵十二番隊をひきいてこれに従う。『慶徳公御伝記 四』は、「是日、総督宮進発せらる。徴兵五番隊・十二番隊隊長岡村喜兵衛^(郎次)従ふ。駿河、弘吉・捨蔵・横井貞一等を従へて、列中前軍の次にあり」という⁷⁷⁾。京都を発した「越後口官軍」は、28日敦賀に着す。ただし、柴捨蔵は、すでにみたように京都の出発は遅れて26日であり、敦賀到着はいつの時点か不明である。総督嘉彰親王は入船を待って、7月6日、海路をとり、発航して高田におもむく。随従の兵隊はすべて陸行とし軍監荒尾駿河がこれを引率して北陸道を進軍した⁷⁸⁾。このとき、「総督府は戦勢の進展をはかり、新来の兵を海軍とし、新潟に遣りて同地を占領し、上陸して敵の背後を襲はしめんとす」⁷⁹⁾。7月23日朝、徴兵十二番隊・五番隊・明石・秋月・薩州・長州の兵に新潟の東松ヶ崎に転身の命があった。これにより柴捨蔵が徴兵十二番隊を率いて敦賀を出た⁸⁰⁾。

2.4 長岡・新潟の戦い

柴捨蔵が進む北越の戦況はどのようになっていたのだろうか。

政府軍は、長岡城奪取後人員、武器、弾薬を補充したうえで、7月25日総攻撃の予定であった。『慶徳公御伝記 四』によれば、長岡藩の河井継之助は、これを察知し、24日夜奇襲を行い、長岡を奪回した。「官軍敗退」し、政府軍の参謀西園寺公望は、「身を以て関原に通れ、更にただ一騎となりて宮本に来る」(関原・宮本は現長岡市)状態であった。政府軍が崩れんとする状況の中で、荒尾駿河、その附属河田弘蔵、さらに「長州藩の小隊司令某」とともに、再三制止し、ようやく事なきを得た、とある⁸¹⁾。29日、政府軍は「長岡総攻撃を行ひ、遂にこれを奪回す」⁸²⁾。しかも、河井継之助は、左足に重傷を負い、指揮官が不在の状況になる。8月16日、河井はこの傷により会津若松に向かう塩沢村(現福島県只見町)で死去する⁸³⁾。

次に、柴捨蔵(北垣)が属する徴兵十二番隊の動きを見てみよう。徴兵十二番隊が新潟の大夫浜(現新潟市街)に上陸したのが河井の長岡城奪回後の7月25日で、「新潟では、同盟軍が武器弾薬の調達を頼っており、新潟港には会津藩兵・米沢藩兵らの同盟軍が警備と防御のため駐留していた。この新潟を平定することが、徴兵十二番隊の任務となった」⁸⁴⁾。

徴兵十二番隊の隊長が岡村喜兵衛、右・左と隊を2つにわけ、右小隊を岡村、左小隊を柴捨蔵が指揮し、7月27日より沼垂・平島あたり(現新潟市内)で戦闘を行い、さ

らに8月10日より坪穴（現新潟県胎内市付近）・榎峠（新潟県岩船郡関川村）で戦闘を行った⁸⁵）。

戦闘は、新政府軍が薩摩・長州・芸州・高鍋・秋月の藩兵、それに因州藩の徴兵十二番隊で、相手は会津・長岡・米沢などの奥羽列藩同盟軍であった。これらの戦闘で、徴兵十二番隊は4名の死者を出した⁸⁶）。

徴兵十二番隊が8月1日から新潟で総督嘉彰親王に勝報および平定を知らせるまでの記事を『慶徳公御伝記 四』から記しておこう。

岡村喜兵衛は右小隊を率ゐて進み、同日（8月1日－高久）大野（現新潟市、以下新潟県内の原地名略－高久）に宿す。左小隊は柴捨蔵これを率ゐ、内野・上五十嵐に分宿し、三日赤坂に進む。三根山藩主牧野忠泰^{伊勢守}帰降し、弥彦の賊退散せるより、新潟に帰る。壬生参謀着陣に付き大野口を守衛す。四日新発田参謀官の命によりて、右小隊は長・芸の兵と酒屋口より新井津に出で、斥候を放ち探索せるに、敵既に去りてあらず。五泉・村松は新発田方面より平げたれば、長岡・村松の間、出雲崎・大野の間悉く平定す。六日、右小隊命により、友隊と新潟に帰る。喜兵衛・捨蔵、総督に捷報を届出でたり⁸⁷）。

柴捨蔵の名でふたたび登場するのは丹波山国郷の藤野斎『征東日誌』の明治元年（1868）10月24日である（慶応4年9月8日が明治元年になる）。この日、東京（7月17日、江戸が東京と改称）で藤野斎は金策に翻弄していた。そんな時、柴捨蔵から藤野斎に対して、誘いがあり、藤野は断り切れずに吉浦の宴会に参加した。宴会には鳥取藩士山田宗平ら3人と「街妓」4人が参加し、山国隊組頭那波九郎左衛門が後から参加した。この席で、柴捨蔵は「別後北越地方に奔回ス、互ニ無事ヲ語り膝ヲ磨シ、杯ヲ挙テ対酌頻ナリ」、柴が6月25日に北越地方に行くために別れて以来の宴会で互いの無事を語りあった。翌25日も、芝口仙台邸で「近江・水源・水康・辻繁四人」、すなわち山国隊の隊員である藤野斎・水口源太郎・水口幸太郎・辻繁次郎が柴捨蔵と杯を重ねた⁸⁸）。11月3日には鳥取藩士山田宗平からの連絡により、柴捨蔵・藤野斎・那波九郎左衛門・宮津藩留守居河瀬外衛、朽木藩留守居永倉某・山田宗平らが深川大満字屋で宴会を行っている⁸⁹）。山国隊の隊中取締藤野斎は借金の処理で頭がいっぱいであったが、宴会の席では借金問題を口に出すことはしなかった⁹⁰）。

3 中央官僚への道

『慶徳公御伝記 四』は、明治元年（1868）12月27日、北垣晋太郎が鳥取藩の馬廻に列することを公用人より申し渡されたことを記す。この時北垣は満32歳であった。

北垣晋太郎儀、当夏以来所々戦争之節、及勇闘候段、神妙之至ニ思召候。依之、此度、御馬廻被召出、四人扶持被遣、応接方其儘相勤候様被仰出候。

但、詰中御側御用人支配被仰付、并続料銀拾五枚は被召上候事。

晋太郎は、もと但州の人、文久三年生野の義挙に加はり、事敗れて後は、八木良蔵といひ、水戸に赴き、又長州に在りしが、是春は柴捨蔵と称し、鎮撫総督に従ひて御国に來り、広く有志に接し、当方周旋方とも、交厚し。六月、家老荒尾駿河軍監にて越後に発するに當り、御雇にて其附属となりて赴き、諸所に戦へるは、上にいへるが如し。前月凱着後、公議人沖探三支配にて、続料を与えられ、是月十八日、願ひて又以前の北垣晋太郎にかへりゐたりき⁹¹⁾。

戊辰戦争の功績の結果、「公議人沖探三支配」⁹²⁾のもと、北垣晋太郎は武士身分になり、続料を与えられることになった。

それから約半年後の明治2年6月12日、北垣晋太郎を弾正台御用に召し仕えしても、「藩に於て差支なきや、御尋ね」があった。翌日、「差支えなき旨御答え」があり、北垣晋太郎に少巡察が仰せつけられた。さらに、8月3日「大巡察に転任宣下」があり、公用人より上申された⁹³⁾。

同じく生野の変に参加した原六郎は、『慶徳公御伝記 四』では次のように記す。生野の変後江戸におもむき鳥取藩の周旋方である千葉重太郎の庇護を受け、禁門の変後、諸所を転々して長州に入り、仏式練兵を大村益次郎に学ぶ。以前より河田佐久馬とは親交があったが、河田が明治元年東山道の軍にしたがって出征すると、その部下としてこれに加わり、同年4月より山国隊の司令官として野州安塚・江戸上野・相州小田原等の戦いに従い、後平潟口の軍に属して仙台に至る。原はこの山国隊司令士としての従軍功績により、明治2年5月、鳥取藩の士列に召し出され、北垣と同じく4人扶持で召し抱えられる⁹⁴⁾。

原六郎は、それから一ヶ月半後の7月5日、朝廷より賞賜を受ける。

原 六郎

昨年賊徒掃擾之功ニ仍テ、目録之通り賜候。

右御書付差出候事。

拝領御馬目録

野分 青毛⁹⁵⁾

このようにして、北垣と原は戊辰戦争の功績により、鳥取藩の武士身分になる。

鳥取藩から中央への道は、北垣の場合、明治2年6月の弾正台少巡察にはじまり、明治4年12月より北海道開拓事業に従事。その後太政官出仕を経て、明治8年7月より元老院小書記官に、翌年熊本県大書記官など各府県で行政職を経験し、明治12年6月より高知県令になった後は、各府県知事を歴任していく⁹⁶⁾。

原の場合、武士身分になった明治2年5月には、親兵第三中隊司令官を命ぜられ、その後第二連隊第一大隊司令官になるが、明治3年2月鳥取藩第一大隊長になり、藩の兵制改革に参画する。しかし、明治4年3月、鳥取藩より抜擢され、欧米視察を命ぜられ、5月に横浜を出帆する。アメリカ・イギリスで修学して、明治10年5月、ロンドンより帰国する。その後は、原は実業界で活躍する⁹⁷⁾。

このようにして、もともと農民出身であった北垣晋太郎、原六郎は武士身分、それから中央の官僚、あるいは実業界に転身を遂げていく。北垣についていえば、「草莽」の北垣晋太郎が、変名を使用しながら、それぞれの局面で重要な役割を果たしていく姿は幕末から明治への時代の変動の激しさを示すことになるだろう。

結びにかえて

最後に、一つのエピソードを記しておきたい。

福井県敦賀市には武田耕雲斎など「天狗」勢の墳墓がある。武田耕雲斎を総裁とする総勢800余人の「天狗勢」は、当時禁裏守衛総督として京都に駐在していた一橋慶喜に素志を披歴するため⁹⁸⁾常陸久慈郡^{だいご}大子（現茨城県久慈郡大子町）を出発したのが元治元年（1864）11月1日であった。各藩の兵に行く手をさえぎられ、迂回の道をたどりながら西上を続けたが、12月17日、敦賀郡新保（現福井県敦賀市新保）において加賀藩勢に降服する。「天狗勢」が加賀藩から幕府に引き渡され、総勢353人が元治2年（1865）2月4日から23日まで計5回に分けて処刑される⁹⁹⁾。

353人の遺骸は3間（5.4メートル）四方の5つの穴に折り重なって埋められ、当初は5つの土饅頭型の五塚と呼ばれていた¹⁰⁰⁾。慶応4年（1868）2月北陸鎮撫使高倉永祐・四条隆謨が北陸・越後に向かう際、香華料2000匹を供するとともに墓所の所有者であった西本願寺に墳墓の改修をさせ、加賀藩主前田慶寧から500両の寄付があった。5月北越総督仁和寺宮嘉彰親王が越後に向かう際、香料3000匹が拠出され、翌年墓所の改築ができたので、西本願寺から派遣された役僧により、来迎寺で法要が行われた¹⁰¹⁾。

この墳墓の地が墓所として改築整備されるのは明治2年（1869）以後のことであるが、現在の石段前に最も古い石灯籠が一对建立されている。慶応4年（1868）7月建立である。向かって右の石灯籠を見ると、前面に「備前 土倉修理之助菅□」^(不明)、裏面に「慶応四年戊辰七月建之」、横面には「永巖寺取次」とある。土倉修理之助とは当時備前岡山藩の家老土倉正彦であり、戊辰戦争では会津征討越後口総督仁和寺宮嘉彰親王の軍監であった。向かって左の石灯籠を見ると、前面に「因幡 河田弘吉郎源寿景 柴捨蔵 日下部国道」、裏面に「慶応四年戊辰七月建之」、横面に「永巖寺取次」と彫られている。河田弘吉郎は、すでに見たように河田佐久馬の弟（精之丞の弟）である。慶応4年（1868）2月17日、許されて京都詰を仰せつけられ、周旋方御雇となり、その後鳥取藩家老荒尾駿河の北陸道への出張に付属し、越後方面の戦争に加わった¹⁰²⁾。北垣が「日下部国道」とも名乗っていたことは興味深いが、石灯籠の建立を頼んだ時点で鳥取藩での役職があるわけではない。

鳥取藩での武士身分での役職でないにもかかわらず、左の石灯籠に河田弘吉郎とならんで北垣の名があることは、鳥取藩の北越軍の中での北垣の位置が推測される。すでに、北垣はこの時点ではかつて有していた攘夷の意識は相当薄れていたと思われるが、どのような意識で「天狗」勢の終焉の跡をみたのであろうか。

写真1 敦賀「天狗」勢墓所



写真2 河田弘吉郎・柴捨蔵寄進灯籠



北垣・河田（弘）らは、敦賀の永厳寺（曹洞宗）に石灯籠建立を頼み、7月6日、敦賀から北陸へと進む。石灯籠の裏面に「慶応四年戊辰七月建之」、裏面に「永厳寺取扱」とあるのは、そのことを示す¹⁰³⁾。

（追記）

本稿作成にあたり、史料収集の点で、鳥取県立博物館、山口県文書館、立命館史資料センターの諸機関にお世話になった。とくに鳥取県立博物館の来見田博基氏にはさまざまな助言をいただいた。また長谷川澄夫氏には、山口県文書館・立命館史資料センターでの史料収集にあたり、これも助言をいただくなどお世話になった。

注

- 1) この史料の性格と特徴については、青山忠正「鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記』」『日本史研究』378号、1994年、が詳しい。
- 2) 山川菊栄『覚書幕末の水戸藩』岩波文庫、1991年、326頁。
- 3) 大内地山『武田耕雲斎詳伝—一名水戸藩幕末史—』上、水戸学精神作興会、1936年、472頁。
- 4) 末松謙澄『改訂防長天回天史』柏書房、1912年発行、1980年、636頁。
- 5) 『防長回天史』は1911年（明治44）が刊行開始で1920年が全巻刊行である。
- 6) 鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記 四』（以下『慶徳公御伝記』と略称）鳥取県立博物館、1989年、652頁。
- 7) 『慶徳公御伝記 二』1989年、576頁。
- 8) 沖探三（守固）の弟。『鳥取藩史 第一巻 世子・藩士列伝』（315～317頁）によれば、元治元年正月16日、江戸詰中老矢野能登の命をうけ、山内衝とともに水戸に赴く。「是は水戸に於ける正奸両派の情況を探索せむが為なり」。禁門の変時、長州を援助しようとするが、堀庄次郎に阻まれてできず、9月5日堀を斬り、これにより切腹する。なお、典拠は不明ながら菊池寛『維新戦争物語』（新日本社、1937年）には、次の文がある。「京洛にひそむ長州の桂小五郎、佐久間克三郎、因幡の八木良蔵・沖剛介・千葉重太郎等とはかり、水戸と長州と、東西呼応して、義兵をあげることを約します」（170頁）。
- 9) 『慶徳公御伝記 二』576～577頁。
- 10) 『武田耕雲斎詳伝』上、470頁。
- 11) 『原六郎翁伝』によって生野の変後の北垣の動向を追うと、次のようになる。文久3年10月14日の沢宜嘉の本陣脱出にはじまる生野の「破陣」後、北垣は須賀ノ山（氷ノ山）を越えて鳥取に逃げるが、同志はみな国にはいず、西村哲二郎とともに、鳥取を去り、京都の因州邸に潜伏した。京都で進藤俊三郎（原六郎）に会い、その後北垣・進藤・西村は、12月28日に京都を發し、翌元治元年（1864）1月初め、江戸に入る。そして、因州藩士で剣客千葉重太郎のもとに4、5か月潜伏する。そののち赤坂檜町の長州屋敷に

移る。ここから推測すると、北垣が藤田小四郎に接触するのは江戸の千葉重太郎のところであろう（『原六郎翁伝』上、103～106頁）。

- 12) 『慶徳公御伝記 二』 637 頁。
- 13) 同様の文章は「侍従備前侯閣下」（池田茂政）に呈した書と「文義同一」としたが、文章に若干の違いがある（『水戸藩史料』下編全、579～582頁）。
- 14) 『水戸藩史料』下編全、吉川弘文館、582頁。
- 15) 『慶徳公御伝記 二』 639 頁。
- 16) 石田寛『津田弘道の生涯－維新时期・岡山藩の開明志士－』吉備人出版、2007年、117頁。
- 17) 『慶徳公御伝記 二』 662 頁。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 『慶徳公御伝記 二』 671 頁。
- 21) 同上、671 頁。
- 22) 『維新史料綱要』第五巻、1940年、289頁、茨城県『茨城県幕末史年表』1973年、160頁。
- 23) 『維新史料綱要』第五巻、307頁、前掲『茨城県幕末史年表』161頁。
- 24) 前掲『茨城県史 近世編』793頁、前掲『茨城県幕末史年表』168頁。
- 25) 塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」』思文閣出版、2010年、518頁。なお、同書中、「宍戸侯父子」の注記で〔松平頼位・頼徳〕と正しい注記を記しながら、それより6行前の「宍戸侯」には〔左馬之介〕と誤った注記をしている。正しくは〔松平頼徳〕であった。お詫びして訂正する。
- 26) 『北垣国道日記「塵海」』の518頁は「宍戸侯父子・藤田等ガ能ク壮士ヲ鎮撫シ」となっているが、「宍戸侯父子、藤田等ガ能ク壮士ヲ鎮撫シ」が正しいと思われる（下線筆者）。
- 27) 青山忠正氏は、長州藩が攘夷の不可能性を知り政策転換があったとすれば、禁門の変で久坂玄瑞が戦死し、周布政之助が自刃し、長州の攘夷論勢力が力を失うなどの下関戦争以前である、と指摘する（青山忠正「『攘夷』とは何か」上田純子・公益財団法人僧月性顕彰会[編]『幕末維新のリアル』吉川弘文館、2018年、105頁）。
- 28) 『北垣国道日記「塵海」』520～521頁。
- 29) 文久3年8月17日深夜に、鳥取藩の京都における本陣本圀寺で22名の鳥取藩士が藩主池田慶徳の側近を襲撃し、3名を殺害し、1名は重傷を負って数日後死亡するという事件。鳥取藩伏見留守居河田佐久馬を首謀者とする。襲撃した側は、その後一人が行方不明、一人が切腹し、20名の集団となった。「本圀寺事件の処分問題」『鳥取県史 第3巻 近世 政治』627～629頁。なお、以下の「二十士」問題の概略については、鳥取県立博物館編『企画展「鳥取藩二十士と明治維新」図録』鳥取県立博物館資料刊行会、2013年。

- 30) 『原六郎翁伝』上, 117 頁。
- 31) 同上, 114 頁。
- 32) 『慶徳公御伝記 三』79 頁。
- 33) 『原六郎翁伝』上, 115 頁。本圀寺事件後、河田らは藩内の家老の助力、藩外からの力、とくに有栖川宮家の支援により結局京都藩邸での謹慎処分という軽い処分になった。河田らは「謹慎処分」といいながら、京都で自由に活動していた。禁門の変後、河田佐久馬ら 20 名の一部に長州藩と深く通ずるものが判明し、20 人を領内西部の黒坂に送還し謹慎させることが決定された(『鳥取県史 第3巻 近世 政治』649 頁)。
- 34) 『原六郎翁伝』上, 119 頁。
- 35) 拙稿「北垣晋太郎の幕末」『社会科学』第49巻第2号, 2019年, 118 頁。
- 36) 『原六郎翁伝』上, 124~126 頁。
- 37) 青山忠正「家茂の参内と勅語-慶応元年夏の場景-」『人文学報』73巻, 1994年, 99~100 頁。
- 38) 「木戸孝允公年譜(其二) 1 頁, (木戸公伝記編纂所篇『松菊木戸公伝』上)。
- 39) 『改訂防長回天史』第五編上, 459~460 頁。9月29日, 木戸は藩命により氏名を木戸寛治と改める。「木戸孝允公年譜」(其二) 5 頁, (『松菊木戸公伝』上)。なお, この書簡は, 木戸孝允関係文書研究会編『木戸孝允関係文書 3』東京大学出版会, 2008年, 259~260 頁にも収められている。
- 40) 「木戸孝允公年譜」(其二) I~5 頁, (『松菊木戸公伝』上)。斎藤紅葉氏は, この年, 5月27日, 木戸は藩の「相談役」となり, 「三歳で実質上長州藩政を主導できる立場になった」とする(斎藤紅葉『木戸孝允と幕末・維新』京都大学学術出版会, 2018年, 98 頁)。
- 41) 『鳥取県史 3 近世 政治』657~659 頁。
- 42) 同上, 666 頁。
- 43) 維新史料編纂事務局『維新史料綱要』第7巻, 377 頁。
- 44) 『維新史料綱要』第7巻, 385 頁。
- 45) 『慶徳公御伝記 四』298~300 頁。
- 46) 『維新史料綱要』第7巻, 410 頁。
- 47) 同上, 424 頁。
- 48) 『西園寺公望伝 第一巻』150~154 頁。1922年(大正11)刊行の中川小十郎『中川人見両姓唱義録』は, 河内山半吾について, 「我々一族をして当時の重大なる時局に参加することを得せしめたのは, かの長藩浪士河内山半吾氏が幾回か長防地方からわが山村に來り自ら秘密の連鎖となつて斡旋してくれた効果も与つて力あつた訳である。」「河内山半吾氏が実に薩長御守衛軍の隠れたる案内であつたらしく思はるるのは御守衛軍中に時々顔を出して居つたことが先人の手記中に記されて居る。」(30~32 頁)と記す。
- 49) 『中川人見両姓唱義録』67~68 頁。
- 50) 『北垣国道日記「塵海」』172 頁。

- 51) 『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』 314 頁。
- 52) 稲葉市郎右衛門編述 『過渡の久美浜』 (舞鶴市糸井文庫所蔵) 13 頁。
- 53) 『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』 233 頁。
- 54) 小谷醇 『安達清風日記』 に読む幕末の鳥取藩』 (自費出版) 447 頁。
- 55) 『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』 233 頁。
- 56) 『慶徳公御伝記 四』 652 頁。
- 57) 『原六郎翁伝』 上, 133 頁。
- 58) 『鳥取県史 3 近世 政治』 716~717 頁, なおこの時期の藩主池田慶徳の心情については, 濱崎洋三「維新时期史料の紹介-慶徳人物像再検討のために-」 「維新时期の鳥取藩」 「最後の鳥取藩主池田慶徳と教育」 『伝えたいこと 濱崎洋三著作集』 116~134 頁, 153~168 頁, 348~376 頁, が参考になる。
- 59) 河田弘吉郎は佐久馬より 13 歳年下の弟であるが, 佐久馬には文久元年当時男子がなく, 弘吉郎を養子とし, それより伏見留守居見習を勤めた。本圀寺事件後, 家名を相続したが, 慶応 2 年, 佐久馬等二十士の脱走の報を聞き, 一家ともども伏見を退散した。鳥取県立博物館 『平成二年度 資料調査報告書 第十八集』, 1991 年, 8 頁。
- 60) 『慶徳公御伝記 四』 391~392 頁。
- 61) 山国隊は結成当初は出征隊員が 35 人で, 内訳は 20 人の名主と 15 人の非名主であった。そして, 「山国の名主はほとんど山持で, しかも筏の到着する嵯峨, 梅津, 桂の三ヶ所に共同の材木の直売店を持って, 京都, 大阪の市場価格に応じて地元の伐採と販売を調整するという商売をしており, 官位任用の費用一切も, この共同経営の利益からでている」 (仲村研 『山国隊』 中公文庫, 1994 年, 66 頁)。つまり, 多くの名主層はおおむね材木の利益でかなり裕福であった。ただし, 仲村研氏の指摘があるように, 山国隊の転戦過程で名主・非名主の差異はなくなってゆく。
- 62) 藤野斎著, 仲村研・宇佐美英機編 『征東日誌-丹波山国農兵隊日誌-』 (以下『征東日誌』) 国書刊行会, 1980 年, 48~50 頁。
- 63) 帰京の目的は, 仲村研氏によれば, ①親兵組と再統一する「郷中一和の件」を解決すること, ②軍資金の募集を行い, 隊員の最大の不満を除くこと, ③留守中家族婦女子の不満を解消するために説得を行うことであった (仲村研 『山国隊』 中公文庫, 181 頁)。
- 64) 『征東日誌』 128 頁, 河田弘蔵 (弘吉郎) と柴捨蔵が近くにいたことを示す。
- 65) 同上, 121 頁。
- 66) 「膽 (胆) ニ砥リスル」とは, 『日本国語大辞典』 (小学館) によれば, 「心に強くうつこと」である。
- 67) 拙稿「北垣国道と鳥取人脈」 『社会科学』 第 48 巻第 4 号。
- 68) 『征東日誌』 130~131 頁。
- 69) 同上, 134 頁。
- 70) 同上。
- 71) 同上, 135 頁。

- 72) 『慶徳公御伝記 四』 634 頁、岡村喜兵衛が徴兵隊長になるまでの経歴は、『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』では次のように記す。文久3年家を継ぎ500石を領す。元治元年(1864)9月、「征長」の軍に参加し、慶応2年(1866)5月、石州路に出征。慶応3年4月、京都を警衛す。明治元年正月5日、伏見の戦いに参加し功あり。7日、橋本を守衛し、12日には、大津を守り、3月大阪に下り行在所を守備にあたり、閏4月供奉して京都に還る。5月、朝廷が徴兵の制を定めて、諸藩に触れた際、兵卒97人を選出し、この隊長となる。これを「徴兵十二番隊」という(311~312頁)。
- 73) この日、岡村喜兵衛より「掟書」が示された(『慶徳公御伝記 四』 634頁)。
- 74) 『慶徳公御伝記 四』 634頁。
- 75) 同上、652頁。
- 76) 同上。
- 77) 同上。
- 78) 同上、690頁。
- 79) 同上。
- 80) 『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』の「岡村喜兵衛」の項目には、「第二小隊は軍監 附属柴捨蔵仮に隊長の事を行ひ、総督宮に従って海路亦柏崎に着す」(311頁)。
- 81) 『慶徳公御伝記 四』 691頁。
- 82) 同上。
- 83) 今泉鐸次郎『河井継之助伝』1909年、376~396頁。大山梓『戊辰役戦史』上、799~800頁。
- 84) 横山展宏「北越戦争と徴兵十二番隊」鳥取市歴史博物館やまびこ館『因州兵の戊辰戦争 -いくさと巾の明治維新-』2011年、70頁。
- 85) 同上、70頁。
- 86) 同上、73頁、『慶徳公御伝記 四』 691~694頁。
- 87) 『慶徳公御伝記 四』 694頁。この記事では徴兵十二番隊は、右小隊は岡村喜兵衛、左小隊は柴捨蔵が指揮したことになっている。しかし、それ以前の7月29日までの記事では、「徴兵半小隊」の一分隊・二分隊を南条熊之丞が指揮し、三分隊・四分隊を柴捨蔵が指揮したことになっている。
- 88) 『征東日誌』190~191頁。
- 89) 同上、194~195頁。
- 90) 仲村研『山国隊』中公文庫、210頁。
- 91) 『慶徳公御伝記 四』 896頁。
- 92) 沖探三(守固)は明治元年6月京都留守居職を命ぜられるが、この役が公務人および公用人と改称される。明治2年8月鳥取藩少参事になり、12月権大参事に進む。廃藩置県後は大蔵省につかえ、岩倉欧米使節団に随従し、帰国後は内務省で各府県知事を歴任する『鳥取藩史 第一巻 世家・藩士列伝』315頁。
- 93) 『慶徳公御伝記 五』 205頁。

- 94) 同上, 167 頁。
- 95) 同上, 215～216 頁。
- 96) 『北垣国道日記「塵海」』 595～597 頁。
- 97) 「原六郎翁年譜」『原六郎翁伝』上, 4～5 頁。
- 98) 一橋慶喜は「天狗」勢の救解に動かなかつたが, その理由と, 多くの藩や勢力が敦賀の地に情報収集のために動いていたことを, 宇和島藩京都周旋方を中心に豊富な史料をもとに検討した仕事として, 仙波ひとみ「武田耕雲齋勢の越前入りと宇和島藩京都周旋方による情報探索 - 都築莊蔵「北行日録」を軸として -」敦賀市立博物館『研究紀要』第三十四号, 2020 年, がある。また, 家近良樹『ある豪農一家の近代 - 幕末・明治・大正を生きる杉田家 -』(講談社選書メチエ, 2015 年) は, 豪農杉田仙十郎が, 松平慶永に提言し, 水戸浪士を当地の開墾に従事させることによって彼らの延命を画策したことを指摘している (56～63 頁)。
- 99) 福井県『福井県史 通史編 4 近世二』 876～884 頁。
- 100) 敦賀市立博物館『郷土の碑文展』 1996 年, 51 頁。
- 101) 敦賀市史編さん委員会『敦賀市史 通史編 上巻』 913 頁。
- 102) 前掲「旧鳥取藩士・子爵河田家文書」『資料調査報告書 第十八集』, 8 頁。
- 103) このほかに, この墓所には興味深い痕跡がある。実は, 鳥取「黒木龍馬会」の 2014 年 10 月 18 日のインターネット上に非常に興味深い記事がある。この会は同日, 敦賀市の「天狗」勢の墳墓を訪れ, 同会的美田眞一会長が鳥取藩京都詰家老荒尾駿河の献上した石灯籠の壊れた姿を発見した。2020 年 6 月 9 日, この地を筆者は訪れたが, その時はこの記事を知らず, 土倉修理之助と河田弘吉郎・柴捨蔵の献上石灯籠を見たのみであった。備前岡山藩の家老土倉が献上した石灯籠があるのに, 同じく参陣した鳥取藩家老荒尾駿河の石灯籠がないことを不思議に思っていた。2021 年 7 月中旬, 鳥取県立博物館来見田博基氏の示唆により, インターネットを検索して「黒木龍馬会」が荒尾駿河の「壊れた石灯籠」を発見していたことを知った。これによれば, 荒尾駿河も石灯籠を献上していたことになる。同年 7 月 30 日, 筆者は同地を訪れ, 墓地に向かって左手前の低木の中に荒尾駿河の「壊れた石灯籠」が確かにあることを知った。なお, 敦賀市立博物館『平成 30 年度特別展 水戸天狗党敦賀に散る』(2018 年) 57 頁掲載の「明治時代末期」の絵葉書写真には, 墓に向かって右側に現在と同じ 1 つの石灯籠が, 左側には 2 つの石灯籠がある。この後, 何らかの事情で墓に向かって現在のような左右対称の 2 つの石灯籠に変わり, 荒尾駿河の石灯籠は左手前におかれ, 結果として打ち捨てられたような形になったと思われる。